

事例番号 45

Keywords: 知的障害を伴う自閉症, 書字, 不器用さ, パソコン, 文字入力, 障害に基づく困難の改善, 指導目標の達成

タイトル

- ・書字に苦手意識がある児童に, パソコンでの文字入力を指導し, 習得することを目指した事例

事例の対象となる児童生徒について

小学部 3 年生男子知的障害自閉症

乳幼児発達スケール (KIDS) 3 : 3

- ・平仮名・片仮名を濁音・撥音・拗音なども含めて, 読むことができる。
- ・簡単な絵本が読める。漢字にも興味を持ち始め, 簡単な漢字を読もうとする。
- ・書かれた 2 語文を読み, 絵とマッチングすることができる。
- ・目と手を協応させることや文字のバランスをとることが難しいため, 書字に苦手意識がある。

使用する機器 (支援機器) 名称と特長

① 支援機器の名称

パソコン (ノート型)

② 特徴

現在では, 誰もが文章作成やインターネットなどを行う際に使用している。

使用した機器を選定した理由

対象児童は, 絵本やキャラクターの名前などに興味があり, 文字を読むことができるが, 手先の不器用さがあり, 文字を書く際に文字のバランスをとることが難しいため, 書字に苦手意識をもっていた。そのため, 書字学習と並行して, キーボードで文字入力ができる機器を使用することで, 苦手意識を緩和しながら作文などにも取り組めると考えた。キーボードで文字を入力することだけに着目すれば, ラベルプリンターやトーキングエイドなども候補として挙げられるが, パソコンは一般に広く普及していて, 汎用性がある。自閉症の特性から考えても, 他の機器を使用するよりも, はじめからパソコンのような汎用性が高く, 将来使用する可能性がある機器を選定した方がよいと考えた。また, 児童の興味関心のあるキャラクターの絵や写真を容易に画面に映すことができることも選定理由の一つであった。

選定のプロセス

パソコンを継続的に使用していくことを考え, 一般的なノートパソコンを使用する。また, 他の児童への影響や設置スペースを考慮し, 移動が可能なノートパソコンを選定する。

個別の指導計画と個別の教育支援計画

本校では, 「個別の課題学習 (教師と児童が 1 対 1 で学習を行う)」を日課表上に帯状に設置し, ほぼ毎日実施している。本事例では, 平成 21 年度後期の個別の指導計画の 1 つの目標として以下の

内容を計画した。

表 3-45-1 個別の指導計画の記述

後期の目標	指導方法
・パソコンに貼られたシールを手掛かりに、複数の単語をローマ字打ちで入力することができる。	・キーボードに貼ったドットシールと手袋の指先の色をマッチングさせてキーを押すようにする。苦手意識をもたないように、適宜教師が支援をする。

また、後期の後半から学校で学習した内容を宿題として家庭に配布し、家庭での児童の実態に合わせて、パソコンの使用方法や手順の変更などを保護者と相談しながら行った。

指導の内容

パソコンの指導を始めるまでは、ローマ字の知識がなかったが、市販のタイピングソフトでは平仮名入力を選択できないものがあることや、拗音や撥音を入力するときに、「Shift」を押しながら他のキーを押すという複雑な作業が必要でないことから入力方法をローマ字入力とした。

パソコン学習の初期の段階では、興味のあるキャラクターとローマ字が書かれたワークシートを見ながら、キャラクター名の入力に取り組んだが、キーボードの操作が初めてのため、なかなか目的のキーを探すことが出来ない様子が見られた。そこで、キーボードにアルファベットのシールを貼り、平仮名や記号などの余分な情報を無くした。また、間違えそうになったときにはすぐに教師が支援し、苦手意識をもたないようにした。すると、アルファベットを入力することで、画面に平仮名が表示されることやそれを変換できることに気付き、入力から印刷するまでの一連の流れが分かるようになったことで、自分の入力した文字が印刷されて出てくるのを励みにして意欲的にパソコン学習に取り組む様子が見られた。

次に、両手を使っての入力を学習するために、支援ツールとして、指先に色を付けた手袋を使用し、キーボードと手袋の色をマッチングさせながら正しい指使いでキーを押すことができるようにした。また、ローマ字変換表を手掛かりに平仮名を見ながらローマ字入力を行うことにし、書字学習を含めて、以下のような流れで指導を行った。

表 3-45-2 学習内容と指導上の留意点 (つづく)

学習内容	指導上の留意点
① キャラクター一覧の中から、その日に取り組むものを3～5つ選択する。	・70種類程度のキャラクターの中から選択することで、意欲的に取り組めるようにする。
② 選択したキャラクターの名前を紙に書き写す。	・鉛筆の持ち方や書き順、姿勢などについては指導するが、文字の間違いなどについては指導

	しすぎないようにする。
③ 自分で書いた文字だけを見ながら、パソコンで入力する。	・入力の際に気付いた間違いや読めなかった文字については、この時点で訂正するように促す。
④ プリントアウトしたワークシートを見ながら、キャラクター一覧にシールを貼る。	・シールが貯まることで、達成感を得られるようにする。

支援機器の使用効果あるいは、指導の効果と支援機器の評価

① 後期の個別の指導計画の評価は以下の通りである。

ローマ字変換表を見ながら、好きなキャラクター名を入力することができるようになった。パソコンのキーボードに貼られたシールと軍手の色を手掛かりにして、両手を使った文字入力もスムーズにできるようになってきている。

②指導の効果と支援機器の評価

個別の課題学習において、書字学習とパソコンでの文字入力の学習を並行して行ったことにより、児童が以前よりも前向きに書字に取り組むことができるようになった。これは、パソコンで文字を打ち込んだ際に簡単に正確な平仮名や片仮名、漢字が表示されるため、文字で表現することの楽しさや便利さに気が付いたり、文字入力の際に表示された文字を見て自分で訂正するようにしたこと、文字の間違いや乱れを指摘される機会が減ったりしたことが要因だと考えられる。さらに、両手でのキーボードの操作やローマ字入力の仕方を並行して指導することで、パソコン技能が向上し、より短時間で文字の入力ができるようになった。

③家庭での取組の様子と保護者からの感想

パソコンでの文字入力については、後期の後半（1月半ば～）から家庭学習においても取り組んだ。当初は学習の継続ということで、好きなキャラクター名を入力することが中心であったが、筆者が担任を外れてからも、それまでに身に着けたパソコン技能を生かし、保護者が児童の取組状況や興味・関心に合わせて学習のステップアップを行ってくださった。その内容としては、漢字変換については平仮名が中心であったキャラクター名を、興味がある駅名に変更したり、文章の入力については、お気に入りの絵本のはなしを入力したりすることなどであった。

以下に、保護者からの感想の一部を紹介する。（アンケートからの引用）

パソコン操作を覚え、慣れ親しむことができました。入力操作により、手指の巧み性を高めるトレーニングになりました。見本をしっかりと見て、集中して取り組む姿勢ができました。まだ不完全ですが、プリントアウトしたものと、見本（例えば絵本）を照合して、確認するという練習ができました。

パソコン入力では、うっかりして目的外のキーに触れてしまうことで、入力が進められなくなる、画面がおかしくなる、ということはよくあるものです。このような場合、自分でどうにかしようとしても難しく、人の助けを借りなければならない状況になります。その際に、離れて家事をしている母のところまで呼びに来ることが、度々ありました。難しい状況になったら、支援を頼むということを、学びやすい学習だと思いました。

パソコン学習を始めた頃は、書字に苦手意識があり、あまり書くことをしようとしませんでした。現在は、日記等、どんどん自分で意欲的に書いています。パソコン学習は、自分が表出した者が文面に出てくるという経験の、第一歩になったのではないかと思います。また、ローマ字や漢字、正しい文章を学ぶという側面もあったかと思えます。

このように、学校で基礎的な技能を身に付け、家庭の取組にまで広がった背景には、パソコンが一般家庭へ広く普及しているために、保護者も操作方法を知っていたことや将来に向けての汎用性の高さから家庭の理解が得られやすかったこともあると考えられる。

まとめと今後の課題

自閉症のある児童は一般的に、動作や操作を伴った学習方法が得意であると言われている。書字は動作を伴う学習であるが、手先の不器用さのある児童も少なくないため、苦手意識もちやすい学習である。書字に苦手意識がある児童への文字学習の指導の在り方にはさまざまなものがあるが、今回の事例においては、パソコンの文字入力と書字の学習を並行して行うことで、児童が苦手意識をもたずに書字に取り組むことができるようになった。また、家庭の協力を得て、学校での基礎的な技能に上乘せしていく形で学習を継続できたことで、パソコン技能が定着し、書字に対してもより意欲的になった。パソコンは、今や一般の家庭に広く普及し、毎日の生活に欠かせないものになってきている。また、仕事においても無くてはならない支援機器の1つである。

パソコンは誰もが同じ手続きで起動、操作を行うため、最初から最も適な方法で教えることができ、自閉症のある児童にとって学びやすく、学校卒業後に社会生活の中で使用する際の活用にも期待がもてる。学校現場においては、小学部段階の児童がパソコン学習を行うための学習環境が十分に整えられているとは言えないが、書字に苦手意識をもつ児童に対しては、書字と並行してパソコンを活用した文字入力の学習を行うことも学習方法の1つではないかと考える。

文献（引用文献・参考文献）

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（2008）．自閉症教育実践マスターブック - キーポイントが未来をひらく - ．ジアース教育新社

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブック－49例の活用事例を中心に学ぶ導入，個別の指導計画，そして評価の方法－」（2012/3）に記載された内容である。